



思った幕府の考えであつたとも考えられる。

元和元年（1615年）、父・徳川家康の命により振姫は浅野長晟と再婚させられることとなり、幼少の子供を置いて蒲生家を去ることになる。豊臣秀吉の正室・北政所の義弟であつた浅野長政の二男で嫡兄・幸長の弟であり、慶長十八年に兄・幸長が嗣子無いままに病死するとその跡を継ぎ、当時は、兄の遺領の紀伊一國三十七万六千五百石を与えられ、和歌山城主であつた。家康としては、何としても味方に付けたい浅野家であつた。襲封の際に、長晟が豊臣氏と縁が深いので、三男の長重を押す声もあつたが、家康が長晟に決めたという話もある。何故か、家康の信頼が厚かつたのであろう。

一方の長重自身も家康の覚えは良く、秀忠には小姓として仕え信頼は厚かつたという。どちらが、浅野本家を継ぐかは紙一重であつたと思われるのである。

播州赤穂の浅野家は浅野長政の三男・長重の嫡男・長直が初代で、長友、長矩と続き、長矩の代で断絶することになる。播州赤穂浅野家が三代五十年と言われるゆえん

である。

長晟は慶長十九年（1614年）の大坂の冬の陣、翌二十年（1615年）の夏の陣には徳川方として参戦し、和泉の檜井の戦いでは、部下で殿軍を務めていた亀田大隅が本軍を離れて功に逸り大野治房を主将とする本軍を離れ突出して来た堀直之と淡輪重政を浅野氏重や上田主水正重安等の協力を討ち取り、岡部則綱を敗走させる功績を挙げたが、紀伊国内では、大坂方の画策による、北山一揆、紀州一揆と土着勢力の相次ぐ蜂起に遭い、戦後、すぐに領内に戻り一揆の鎮圧に忙殺された。大坂方は一揆の蜂起を合図に攻撃する作戦であつたが、功に逸る先鋒大将等が先陣争いに終始し戦機を逸したとされている。

元和五年（1619年）、豊臣恩顧の大大名であつた福島正則が居城広島城の無断改築の罪を問われて改易されると、その後を受けて安芸広島四十二万六千石を領して広島城主となる。山陽道の要衝を預かる豊臣恩顧大名の筆頭格の福島家は幕府がいずれば取り潰すことになつていたとされ、家康が秀忠にそのようなことを伝えてい

たとも言われている。無断改築は単なる理由付けに過ぎないものであつた。武家諸法度を知る正則は事前に將軍秀忠の側近本多上野介正純に改築を届け出て口頭ではあるが内諾を得ていたという。秀忠と正純による福島家取り潰しの謀略であつたと思われる。福島潰しが先にあつたと思われる後味の悪い事件であつたが、將軍家の威光は凄まじいものとなり、諸大名で幕府に抑え込まれて徳川政権が確立する契機となつた。

元和二年（1616年）四月に興入れ。翌年に長晟の次男光晟を生むも高齢出産による無理が祟り、その十六日後に亡くなつた。享年三十八歳。和歌山吹上寺で火葬され京都の金戒光明寺に葬られ、後に、広島正清寺に改葬された。その報を聞いた息子の蒲生忠郷は会津の融通寺に寺領を寄付して母・振姫の菩提を弔うよう命じている。法名は正清院。後に紀州に移封した家康の十男・徳川頼宣は姉にあたる振姫の菩提供養のため、光恩寺（和歌山市大垣内）に墓を建立している。

尚、光晟の兄の長治は浅野本家の長男ながら側室の子とされたた

め、浅野本家を継ぐことは許されなかつた。浅野本家の家督を継いだのは正室の子である異母弟・光晟であつた。

光晟は二男ながらも振姫の所生であつたので、福島正則改易の後を受けて和歌山から広島に移つて四十二万石の広島藩主となる。広島浅野家は、振姫の直系となり、徳川將軍家の親族となり、その後も優遇されることになる。

長男ながらも側室の子とされた長治は、寛永九年（1632年）十一月二日に父の遺領のうち備後國三次郡と恵蘇郡に五万石を分け与えられて、ここに三次藩を立藩し、その初代藩主となる。その後、三次藩の基礎を築き、名君として三次の歴史に名を残した。長治の三女が忠臣蔵で有名な播州赤穂城主の浅野長矩に嫁いだ瑤泉院（阿久里姫）である。

尚、浅野氏の方は現在に至るまで振姫の子孫が続いているが、蒲生氏の方は息子二人が夭折し無嗣改易、娘の嫁いだ加藤氏も後に謀反の疑いで改易させられるなど不幸な結果となつている。